

ヨーロッパの旅

— 終 —

平井信義



ヨーロッパの旅を終えて、すでに五年となる。その思い出はつきない。旅行中、つらかったり淋しかったりすることが多かったけれど、こうして思い出しながら筆をすすめていくと、懐しさがこみ上げてくる。つらかったこともかえって楽しく思い出されるのである。

いま、私の耳もとはイタリア歌劇団による「リゴレット」が奏でられているが、慣れないことばを使ってミラノのスカラザでオペラの切符を買った時のことを思い出す。平服の者のみが許される一番の高見から、舞台を眺めたものであった。その下にはタキシードと夜会服をきちんと着た男女が、行儀よく並んでオペラを聞いていた。幕間に下の広間に降りてみると、それらの男女が

今でも何かの折に思い出す。

パリのオペラ劇場でも、ウィーンの国立劇場でも、同様のことがあった。昨日のように、それらが思い出される。

手を組み合せて、喋りながら、時計の針と同じ方向にぐるぐると旋回しながら歩いていた。その間を縫って、よれの洋服を着た東夷が、もの珍らしそうにうろろうと歩いていたのであった。幾つかの椅子には、大きな西洋扇を手にしてそれで自分の胸元をあおぎながら、群衆の旋回を眺めている女性もあった。中に、またと見られないほど美しい少女がいた。その美しさは、

テレビで、私が赴いた国々のどこかが映し出されると、心を奪われたように見入ってしまう。しばしば、目覚えのある懐しい建物や街路がうつる。ああ、あそこで地図をひろげたりしたものだと思う。一人旅の私は、訪れた先々で地図を買い、それを町角でひらいては方角を見定めたものであった。お金に乏しかった私の旅では、タクシーにのことは許されなかった。一日の大半を歩いたのである。イタリアーでは、二〇軒も歩いた日がある。ソルボンヌの森では、道に迷って、目的の国際児童センターに行けない

かと思つたこともある。しかし、こうして歩き廻つたおかげで、町の隅々の印象が、ちよつとした契機がありさえすれば、実に鮮明に思い出されるのである。おそらく、今度訪れた時には、それが、もつともつと克明に脳裡に刻まれることであらう。それが、今から楽しみである。今度は、家内も一しよに、もつと気楽な旅を実現したいなどと、夢見ている。それにしても、町角で、地図をあつちに向けこつちに向けている黄色人種を、向うの人はどのように見たらうか。油気の少ない黒い髪をした疲れた一人の男を、彼らはうす笑いをして眺めたかもしれない。そのような雲圍氣を強く感じた国々もある。しかし、パリーなどでは全くそのようないな気がしなかつた。真つ白な顔をした若い女性が、黒人と手をつなぎ合つて、幾組も通つた。そうした女性は、黒人と一しよに歩いている我が国の女性とは非常に異つて、気安い友人という形で話し合いながら歩いてた。その中の幾組かを今も忘れることができない。

私がヨーロッパを訪れた五五年、五六年という年は、第二次世界大戦の後の、最も落ち付いた年であつたかもしれない。まだ、ベルリンの問題は今日の対立を予感されるような片鱗しか見えなかつた。アメリカとソビエットの対立も、今日とは較べものにならなかつた。漸く国々の復興が緒につき、皆の顔には何か明るいものがあつた。このまま、或いは世界の国々が戦争などしないで、

友好を保てるのではないかという希望も持たれてたときである。一方、アフリカの諸国は、独立への歩みを進めていてきいていたが、その力はそこに植民地を持つてゐる国々によつて認められるのではないかとさえ思われた。

しかし、私の帰国後、わずか五年の間に、すでに、日増しに不穏な空気がヨーロッパに流れ始め、今日の非常に大きな不安を作つてしまつた。東独などに暴動が起きて、それがきっかけで、ヨーロッパに再び戦亂の起きるようではなければよいが……。アフリカの黒人の諸国も、互いに手を取り合うばかりでなく、白人たちとも手を取り合うことをして欲しいのだが、次々と対立し、再び戦禍を招くようなことにならないだろうか……。それらの不詳事が起ると、再び不幸な子どもたちがどつと増加する。そのような悲しいことがなければと思う。現在の不穏な動向は、ヨーロッパ及びアフリカという遠い国々に起きているようであるが、世界的時間的距離が短縮している現在、いつ、日本にも飛び火するかわからない。こう思うと、私は著しく不安になるのである。

人間の一人ひとりの生命を大切に思えば、人を殺さなければならぬような戦争は、どうしても出来ないはずであるのに、それを避けることの出来ない人間の知恵は、どこから生れてくるのであるうか。国と国との和——このようなことを口にするのは、まことに簡単なことでありながら、我々の周囲の人間さえも仲よく

できず、お互いに争うことの多い日常を見るにつけても、平和な
どということには、まことにむずかしいことに思えるのである。殊
にお互いにくしみ合う契機を作っている悪魔が、どこにひそん
でいるのか。個人の中にあるのか、集団の中にひそんでいるのか。
或いは、ヒットラーの如き病的な人格がそれを誘い出すのであろ
うか。昨日も、ヒットラーの病的性格を浮き彫りにした映画をみて、
しみじみとそれを使ったのである。そして、ヒットラー自身、病
的であつたことを微塵も思わなかつたのではないかと思つて、慄
然としたのである。

ヨーロッパに滞在中、私はたくさんの家庭を訪問する機会を得
た。その幾つかをこの「ヨーロッパの旅」の中でも紹介したはず
である。それらを思い出すと、私の訪れたどの家庭も、夫婦も親
子も、いつくしみ合つて生活していた。もちろん、このように筆
を走らせている間に、彼らの幾組かは夫婦げんかをしているかも
もしれないし、ママからパンチを喰つて泣いている子どもがあるか
もしれない。しかし、相手を殺そうなどとは思っていないし、い
つくしみ合つて生活したのである。そうした家庭を、一挙にし
て葬つてしまふのが、戦争である。数日前の新聞に、アフリカの
或る国で戦死した人々が散乱している光景を見て、ひどく悲しく
なつて、その新聞を放り出してしまったのを思い出す。その人た
ちの家族の悲しみはどんなであらうか。それが、いつかは私自身

の身にふりかかるようにも感じたのであつた。

平和——このことを口にするのはやさしい。書くこともやさ
しい。しかし、平和を妨げようとしている意志について、それを
見分けるのは非常にむずかしい。一人ひとりの個人についても、
同様である。個人の中に、平和を妨げようとして絶えず動いてい
る衝動がないとは言えないと思う。それが、幼い頃の教育とどの
ように結び付いているのであろうか。そう思いながら、ヨーロッ
パの町々を蘇らせる、あの美しさにせよ醜さにせよ、戦争によつ
てだけは破壊されないようにと思うのである。

この「ヨーロッパの旅」も、編集部のお求めに応じて、気の向
くままに、四年余りも書き綴つてしまった。私には楽しい執筆で
あつたけれど、読者の目をけがす部分も多くあつたのではないかと
恐れている。しかし、個人的には、たくさんの激励をいただいた。
私の存じ上げていない保育者の方々から、何通かのお手紙を
いただいたりした。それらに励まされながら、今回まで延々何十
回かを重ねてしまつたのである。

ここで一ぺん筆を擱こう。また何年か先に、なお心に留つてい
る旅先での思い出を、更に書き綴る機会を得たならば、それを実
現してもよいと思う。おそらくその時には、もつともつと美しい
思い出のみが浮かび上つてくると思う。